

夢のあとさき その1

昭和50年4月、磐城高校に入学して、部活動に入部したのは、硬式野球部であった。昭和46年夏の甲子園で準優勝した磐城高等学校野球部は憧れだった。小学校6年生の夏の甲子園は、下馬評では、2回戦で当たった日大一高の前評判が高く、磐城高校は負けるのではないかと巷の噂であったが、夏休みのプールでの小体連の水泳大会の練習中に勝ったという結果が舞い込んできた。それからは、テレビにくぎ付けとなり、お盆をまたぎながら、どこの家でも磐城高校の対戦の日にはテレビの前に親戚一同が集まって、磐城高校を応援した。勝つと流れる磐城高校校歌も覚えてしまった。磐城高校で野球がしたいと心から願ったものである。

コバルトブルーの野球部のユニフォームに憧れ、受験勉強に精を出し、合格して、意気込んで入部したところ、父が単身赴任になり、母がその生活を手助けするために何日か家を空けることが多くなって、祖母と弟の食事の世話や洗濯などを自分がやらなければという重荷と、ハードな練習の始まりとが相まって、3週間もすると、続くかどうかとても不安になった。

ある日、ティーバッティングのボール上げを昼休みにしていると、他の部活動の先輩が自分にもやらせてほしいということになって、ボールを上げたときに、バットへの当たり所が悪く、ボールが私の眉間に飛んできた。

当初は、何が起こったのかわからず、うずくまっていると、いつの間にか保健室に運ばれ、救急車に載せられ、病院で様々な検査を受けた。放課後まで病院におり、その後、学校に戻り、部活動をせず家に帰ることとなった。2、3日様子を見るために部活動をせず、家に帰ることになると、もう、部活動に戻れないような気分になり、張り詰めた気持ちが空気が抜けた風船のようになって、部活動を辞めることになったのである。

その夏、磐城高等学校は夏の予選を勝ち抜き、甲子園大会に出場した。応援団の一員として、10泊11日の京都での生活を送った。言わずもがな、野球部の同級生は、部員として甲子園練習も行い、ネットの向こう側ではつらつとしていた。ユニフォーム姿がまぶしかった。でも、あちら側には入れない自分がいた。

爾来、甲子園は私の夢の先となったのである。

教員生活の4年目から、田村高校野球部の監督となり、9年間生徒を指導した。昭和62年から平成7年までだったが、平成3年秋と平成4年春には、県大会で準優勝して、東北大会に出場できた。

平成7年の夏の甲子園の3回戦で母校磐城と戦い、3-2で敗戦した。その後、磐城は、甲子園に出場した。次の年に人事異動で母校に戻り、部長を3年間、顧問を6年間務めた。ミレニアムから21世紀になって、母校は男子校から男女共学校に大きな変遷を遂げていった。この間も甲子園は遠い夢の先であった。(続く)